

研究成果報告書

経営学部 経営学科 久世恭子

本研究成果報告書では、報告者が 2024 年 3 月 30 日から 2025 年 3 月 31 日まで、海外交換研究員としてイギリスのリバプール大学に派遣された際の研究成果について報告を行う。派遣期間中の研究課題は「言語教育における文学的教材利用の新アプローチ」であり、報告者が助成を受けている科研費（課題番号 JP23K12245）の研究課題「英語教育における文学的教材の現代的意義と実践の研究」とも密接に関係するものである。主な研究の目的は、言語教育における広義の文学的教材の意義や役割を現代的なコンテキストでとらえ直し、最新の知見を取り入れて多角的な視点から研究することである。

派遣期間中は、日本国内で行っていた研究を継続すると共に、リバプール大学の研究協力者である Dr Christian Jones 先生、同じくリバプール大学の教員で SLA (Second Language Acquisition) を専門に研究されている Dr Nektaria Kourtali 先生と 3 名で共同研究を立案し、準備を進めた。この共同研究は現在も継続中であり、今後、報告者は主にデータ分析の役割を担うことで合意している。

以下に研究成果の詳細を記す。まず、2024 年度中に既に公表した研究成果について述べ、次に、2025 年度に公表を予定している研究成果を示す。そして、共同研究と派遣先大学内外で行った研究活動についても詳細を報告する。

1. 2024 年度に公表した研究成果

1.1 論文

- 1) Kuze, K. (2024). Developing Creativity Using Literature in the EFL Classroom.
The Newsletter of the IATEFL Literature Special Interest Group September 2024(52)
23-25.

本論は、2024 年 4 月の IATEFL (International Association of Teachers of English as a Foreign Language) 大会において、Literature の SIG (Special Interest Group) Showcase で行った発表の post-conference paper である。SIG の編集委員長である Laura Baldwin 先生からの依頼により執筆した。IATEFL はイギリスにおいて外国語としての英語を教える教員の代表的な学会で、Literature, SIG は英語教育の教材として文学を研究するリサーチ・グループである。

本論では、文学作品と映画を教材とする授業でどのようにクリエイティビティ（創造性）を育むことができるか議論した。クリエイティビティは近年の外国語教育のキーワードの一つであり、その育成のために文学教材の果たす役割が注目を集めているが、教室での実践例の提示は限られている。対象とした授業では、社会言語学のテキストを主教材とする授業の一部で、G. B. Shaw, *Pygmalion* のテキスト（抜粋）と映画を用いた。受講生は、作品をメンター・テキストとし、それに反応する形での sequel（続編）を書く活動を行った。ライティングの分析とアンケート調査の結果から、このような文学作品や映画は学習者がクリエイティビティを育むために有用であり、本論で提示したよ

うな、文学をもとにしたクリエイティブ・ライティングは第二言語・外国語教育に人間性をもたらす (humanising) という意味でも価値があると結論づけた。(発表の詳細については本報告書 1.2.「学会発表」1) もご参照ください。)

- 2) Kuze, K. (2024). 'Authenticity' in English Language Teaching.
『経営論集』(103) 73-84, 2024 年 11 月

本論では、日本で英語を教える大学教員が authenticity をどのように捉えているかについて分析した。Authenticity は英語教育の文脈では、「現実社会で使われる生きた英語」を意味する。報告者は 2025 年にイギリスで出版予定の書籍に論文を執筆しており、6 名の教員に英語教育での文学教材使用についてインタビュー調査を行ったが、その際に研究参加者全員が文学教材は authentic であると述べたため、本論では authenticity のみに焦点を当て教員の見解を詳細に分析した。まず、authenticity の定義について歴史的な議論の変遷を概観し、次に、Tomlinson が 2017 年に提案した authenticity の 6 区分の枠組みに従って、研究参加者のインタビューを質的に分析した。その結果、参加者が authenticity という言葉を用いる際にそれが何の authenticity を意味するかは様々で、text、task の各 authenticity の他に、learner and teacher authenticity、context authenticityなどを意味することが明らかとなった。さらに、日本の英語教育分野では、近年、文学は authentic でないという理由で排除されてきたにもかかわらず、本研究の参加者全員が authentic であると主張していたことをつけ加えたい。

- 3) 久世恭子「英語教育で用いる現代児童文学の多様性について」
『東洋大学人間科学総合研究所紀要』(27) 193-205, 2025 年 3 月 (査読有り)

本研究ノートでは、文学教材を取り巻く最近の英米の状況を概観しつつ、主に中等教育で使われている海外の現代児童文学を多様性という視点から分析し、日本の英語教育にどのような示唆が得られるかを考察した。その結果、日本では、主に読解力向上の目的で伝統的な児童文学作品が使用されることが多いのに対し、英国をはじめとするヨーロッパ諸国ではフォーマットやテーマ、さらには言語活動において多様性を備えた現代児童文学が言語教育で活用されていることが明らかになった。フォーマットに関しては、例えば、グラフィック・ノベルや詩的小説を含めること、テーマについては人権・環境問題への関心も高めること、言語活動ではディスカッションやライティング活動にもつなげることなどが見られた。日本とこれらの国々では社会的・文化的背景や外国語教育の位置づけなどに違いがあるため、全てをそのまま導入することは難しいとしても、このような世界的動向や知見を理解しておくことは重要である。特に、児童文学という教材が英語学習の中で一定の役割を果たしているからこそ、この分野でのさらなる研究が必要であることを訴えた。

1.2 学会発表

- 1) Kuze, K. (2024). 'Developing Creativity Using Literature in the EFL Classroom'

The IATEFL Conference, SIG Showcase (Brighton, UK). 18 April, 2024.

本発表では、近年、言語教育におけるクリエイティビティ（創造力）の育成が注目されていることを背景に、文学を教材とする授業で教員がどのようにクリエイティビティを育む実践を行うか、また、それに対して学習者がどう反応するか、探求した。具体的には、社会言語学を一般向けに解説するテキストを主教材とする大学英語授業に、*Pygmalion* のテキストと映画を取り入れ、受講生には sequel（続編）を書いてもらってライティングとアンケート調査の分析を行った。その結果、以下の点が考察された。

- ・ 受講生は創造力、共感、批判的思考力を使いながら続編を書く活動に参加した
- ・ 活動は、受講生の解釈する力や推察する力の発展に役立つ
- ・ 文学テキストは学習者が創造的に読み、書くことを促すことが推察される
- ・ 受講生自身が続編を書くこと、それを他者と共有し異なる意見や感じ方を学ぶことを興味深いと感じていた
- ・ このようなクリエイティブ・ライティングは、テキストの深い読みにつながる

報告者は長年にわたり IATEFL の会員であったが、年次大会が毎年 4 月に行われるためこれまで日本から参加することが叶わなかった。2024 年度のイギリス滞在中によく参加して研究発表をすることができ、同分野の研究者と情報交換し交流を深めることができた。

- 2) Kuze, K. (2024). 'Exploring the Potential of Picturebooks from a Mediation Perspective'. Reading for In-depth English Learning: Texts in and Beyond the Classroom (Bodo, Norway). 8 May, 2024.

本発表は、ノルウェーのノード大学主催で行われた英語教育における児童文学をテーマとした国際学会で行った。報告者は、2024 年 1 月に出版されたイギリスの学術雑誌 *The ELT Journal* に同大学の Dr Janice Bland 先生の書籍 *Compelling Stories for English Language Learners: Creativity, Interculturality and Critical Literacy* の書評を執筆したことから、主催者である Bland 先生の既知を得て参加させていただいた。

発表では、CEFR, CV（ヨーロッパ言語共通参照枠、補遺版）で採用された mediation の概念を英語の授業でどのように活かすか、英語絵本 *The Giving Tree* とその日本語翻訳 2 件を大学授業で用いた実践を例にあげて議論した。教室談話とアンケート調査の分析から、このような言語横断的な授業は、複数言語における学習者の言語的な気づきを促し、解釈する力を養うことを示した。また、*The Giving Tree* のように普遍的なテーマを持ち、教材として注意深く選ばれた英語絵本は、大学生を含めた青少年や成人に向けた英語教育の中でも有効に使うことができることを主張した。

- 3) Kuze, K. (2025). 'Shared Reading and Its Application in English Teaching in Japan'. JAILA（日本国際教養学会）第 13 回全国大会（オンライン・ポスター発表）. 15 March, 2025.

本発表では、リバプールでチャリティとして行われている shared reading の活動を紹介し、日本の英語教育への応用を議論することを目的とした。Shared reading は文学を読むことを通して個人の健康や幸福、コミュニティ内の連帯に資するなど様々な目的を持つが、本発表では外国語能力の向上という点に焦点を当てて研究成果を示した。データとして用いたのは、報告者自身が7か月にわたって参加した際に記録したジャーナル（自伝的アプローチ）、shared reading を主催する団体である The Reader から提供された外国語学習者へのアンケート調査結果（集計後のデータ）、参加者のインタビューデータの3件である。分析の結果、shared reading は、語彙やリズムの習得など外国語を学習する上での様々な利点を持つが、中でも学習者がスピーキングの自信を高められるという点で顕著な効果が見られた。また、日本の英語教育へ応用する際には、授業前後の課題や評価方法などを考慮する必要があること、コミュニケーション能力向上を目的とする授業では言語的にやさしく短めのテキストを使って英語でのディスカッションを重視する必要があることなどを提案した。このように、いくつかの修正が必要ではあるが、shared reading は日本の英語教育でも大きな可能性を持つと結論づけた。

- 4) 久世恭子 (2025) . 経験を語る、教育を紡ぐーナラティブ研究の新たな可能性ー
JAILA（日本国際教養学会）第13回全国大会 2025年3月15日、シンポジウム・オンライン登壇

本シンポジウムは、2025年にイギリスで出版予定の書籍 *Weaving Stories of Language Education with Narratives of Teachers and Learners* の内容に基づき、英語教育の様々な側面をナラティブ研究で結びつけるという目的を持って企画された。報告者は執筆を担当した Chapter 6: Teachers' Views on the Use of Literature in the EFL Classroom: Analysis of the Interviews with University Teachers in Japan について研究の内容を紹介した。本発表では、研究の目的や背景、インタビューの大まかな分析結果を公表したが、それらと共に、質的アプローチの研究手法や NVivo という QDAS（質的研究を補助するソフトウェア）の使い方、使用することの長所・短所などについても詳しく説明し、発表後には英語教育におけるナラティブ研究の意義について他の登壇者や参加者と議論した。

以上、2024年度中に公表した研究成果について説明した。特に重点的に行った研究内容は、派遣期間の研究課題である「言語教育における文学的教材利用の新アプローチ」と、以前から研究を重ねていた「文学教材に対する教員の信念・姿勢についての研究」である。前者については、リバプール大学の研究協力者であった Dr Christian Jones にご指導をいただき、文学作品に見られる spoken language（話し言葉）の研究や文学を通してのスピーキング能力育成の研究を開始することができた。従来の文学作品利用が、特に、日本の英語教育では読解中心であったことを考えるとこれは新しくかつ重要なアプローチで、今後、研究を発展させていくべき分野であると考えている。また、リバプール大学のプログラムやイギリス国内外での学会に参加することにより、CEFR の概念を英語教育にどう活かしていくかを

探求し、クリエイティビティとメディアーションについては既に学会発表や論文執筆を行った。英語教育で扱う児童文学の多様性についても理解を深めることができ、今後、日本においてもこの傾向を理解しておく必要があるという提言を行った。その他、リバプールを中心にイギリス全土で行われている shared reading の活動と学会に参加し、文学を用いた新しいアプローチとして研究を開始することができた。

2. 2025 年度に公表を予定している研究成果

2.1 論文

次の 2.2「学会発表」の研究内容に関連して論文の執筆を予定している。

2.2 学会発表

- 1) Kuze, K. (2025). Exploring the Potential of Shared Reading for English Language Learning. The JALT PanSIG Conference 2025. Forum. 18 May, 2025. 神田外語大学.

本発表は、報告者が所属する SIG, Literature in Language Teaching のフォーラムに登壇して研究発表を行うものである。報告者がイギリスで体験した shared reading の活動に焦点を当てて、日本の英語教育への応用をする探求する。自身のジャーナルによる自伝的アプローチや外国語学習者へのアンケート・インタビューの分析から、この活動は外国語学習の中で大きなポテンシャルを持っていて、特に学習者のスピーキングの自信を高めることに効果があることを明らかにする。また、日本の英語教育へ応用する場合に修正すべき点や予想される実践上の困難などについても発表し、文学作品の持つ意義や役割について他の登壇者や会場の参加者と議論する予定である。

- 2) ハロッズで売られた福島産の桃をめぐる日英報道の相違：言語的な視点からの分析（発表応募中）

本発表では、ロンドンの有名デパート、ハロッズで売られた福島産の桃をめぐる日英の報道の相違を言語的な視点から分析する。この件は、日本国内ではポジティブなニュースとして取り上げられたのに対し、イギリスでは BBC や The Times などのメディアが放射能汚染の可能性のある農作物が販売されたことを問題視して報道し、大きな関心呼んだ。本研究では、日米の報道の違いを、Sketch Engine を用いたコーパス分析、NVivo による質的研究、discourse analysis（談話分析）など言語分析の複数の手法を用いて明示的に示す予定である。この研究は、報告者のメインの研究テーマである文学教材を扱ったものではないが、イギリスで感じた日米の報道における違い、リバプール大学で研究したコーパス言語学や discourse analysis の知見を活かして発表をまとめたいと考えている。

2.3 著書

- 1) Kuze, K. (2025). Teachers' Views on the Use of Literature in the EFL Classroom: Analysis

of the Interviews with University Teachers in Japan. In N. Sakamoto, M. Teranishi, M. Nasu, and K. Kita (Eds.), *Weaving Stories of Language Education with Narratives of Teachers and Learners*.

本研究では、日本の大学英語教育で文学教材を使っている、あるいは、使ったことのある6名の教員にインタビューを行い、文学教材に対する信念・姿勢を分析した。派遣期間中にも現地の教員にインタビューを行い、データを追加することができた。収集したインタビューのナラティブをテーマ分析 (Thematic analysis) によって分析した結果、3件のテーマと8件のコードを確認することができた。3件のテーマとは、1) authenticity, 2) benefits of using literature in English language teaching and learning, 3) challenges and suggestions であり、それぞれに下位区分としてコードを持つ。

出版前の書籍であるため結果の詳細を差し控えるが、この研究は、文学教材を使う教員はどのような信念や姿勢を持って使っているのかという、これまで日本でも海外でも余り研究されてこなかったテーマに焦点を当てている。結果として、すべての参加者が文学教材の持つ authenticity を強調し、英語能力向上につながる様々なベネフィットを認識していることを明らかにした。さらに、この論文は、英語授業の教室で実際に文学を使う時に起こりうる困難とそれを解決するための方法も提示しており、今後、文学を利用する教員が効果的な授業を行うための一助になることを目指している。

3. 継続中の研究

3.1 共同研究

プロジェクト名：The impact of instruction on noticing collocations in literary texts: an eye-tracking study

研究協力者であるリバプール大学の Dr Christian Jones 先生、派遣先の Department of English 所属で SLA (Second Language Acquisition) を専門に研究されている Dr Nektaria Kourtali 先生と3名で共同研究を立案し、準備を進めた。この研究は、文学教材の特徴の一つであるコロケーションに注目し、学習者のテキスト読解中のアイ・トラッキング (目の動き) と読解後のリコール・インタビューから英語学習における文学教材の有用性と事前インストラクションの効果を追求するものである。この共同研究は現在も継続中であり、今後、報告者は主にデータ分析の役割を担うことで合意している。当初は派遣期間中に完了する予定であったが、リバプール大学から倫理的許可を得るのに予想以上の時間がかかったこと、実験研究であるため複雑な実験器具が必要でそのための準備と実験器具の修理に長時間を要したことなどにより、実験開始までの時間が長引いている。

4. その他、研究に関する活動

4.1 学会参加

- 1) The IATEFL Conference, SIG Showcase (Brighton, UK). 18 April, 2024. 研究発表
- 2) Reading for In-depth English Learning: Texts in and Beyond the Classroom (Bodo, Norway). 8 May, 2024. 研究発表

- 3) PALA (Poetics and Linguistics Association) Summer school and Conference (Sheffield Hallam University, UK). 24-29, June 2024. 文体論の学会及びサマースクールに参加
- 4) International Summer School (University of Cambridge, UK). 29 July – 2 August, 2024. インターナショナル・サマー・スクールに参加して、Shakespeare' Sonnets 朗読が英語能力向上に与える影響を研究
- 5) International Shared Reading Conference (Liverpool, UK). 10 October, 2024.
- 6) JAILA (日本国際教養学会) 第 13 回全国大会 (ハイブリット開催) 15 March, 2025. ポスター発表、シンポジウム登壇 (オンライン)
- 7) その他、イギリス国内の学会 (オンライン) に数回出席

4.2 リバプール大学大学院 (MA: Applied Linguistics and TESOL) プログラムに参加

- 1) Semester 1 (September 2024 – December 2024)
 - Second language acquisition
 - Analysing Language: Tradition and techniques
 - Lexis and vocabulary teaching
 - Corpus analysis
- 2) Semester 2 (January 2025 – March 2025)
 - Research skills
 - Discourse analysis
 - Language and identity
 - Literature in second language teaching

4.3 Shared Reading の活動

報告者は、2024 年 9 月より 2025 年 3 月まで、週 1 回の頻度で 3 つのタイプの shared reading のグループに参加した。参加したグループは、英語を母語としない参加者のためのグループ (A group for speakers of English as an additional language)、*A Christmas Carol* を読む 3 回シリーズのグループ、英語のネイティブスピーカーが中心となる通常のグループで、毎回、ジャーナルをつけ、自伝的アプローチをとって研究データとした。

以上、既に公表した研究成果、今後公表する予定の研究成果、派遣期間中の大学内外での研究活動の概要を記して、研究成果報告とする。報告者が協定校交換研究員として充実した研究活動を行えるようご尽力くださった東洋大学、リバプール大学の関係者の皆様に心より御礼を申し上げたい。